

皆さんこんにちは、今日はお客様としまして、会員増強ゲストとして西中 督様、ようこそお越しいただきました。ごゆっくりとお過ごしください。

3月17日(日)尾川委員長のもと、「米山奨学生 金君送別会」が行われました。ご参加の皆様、ご苦勞様でした。井上薫嘉会員、二年間ロングランのお世話いただきありがとうございました。



シルベスター・シール



ディアボーン街北127ユニティビル

今日は「ロータリーの黎明」の話をします。

1905年2月23日木曜日の夜はとても寒い夜で、ミシガン湖から吹き付ける、小雪混じりの身を切るような寒風が吹き荒れていました。ポールと彼の顧客でもあった石炭商シルベスター・シールは、イリノイ街18にあったマダム・ガリの店で夕食をとりながら、兼ねてから話していたロータリークラブ結成の構想を具体的に説明しました。

「私は実業家のクラブについて、ずっと考え続けてきました。それはシカゴにある今までの社交団体とは全く違った、新しい種類のものです」

「それはどのように違って、どんな意味を持つクラブなのですか？」シールは尋ねました。

「そうですね。知己と友情を十分に強調したいですね。しかしそれだけではなく、会員同志がお互いのビジネスを伸ばせたらいいと思います。それは難しいはずはないと思うのですが」

「たとえば、二人の会員が同じ職業を持つことができないと決めればいいでしょう。そうすればクラブの中には競争相手がなくなります。もし会員の誰かが品物やサービスが欲しいときには、クラブ内の人と取引する義務を持たせたらいいでしょう。相互扶助の一種だけれど、どう思います？」

シールはポールの構想に全面的に賛同しました。二人はシカゴ川にかかる橋を渡ってシカゴ市ディアボーン街ユニティビル 711号にある鋳山技師ガスターバス・ロア事務所に行きました。そして既にその場で待機していたロア、洋服生地商人ハイラム・ショーレーと共に、ロータリークラブ設立のための最初の会合が開かれたのです。

友人たちを見て微笑んでいたポールは、突然緊張した面持ちになって話し始めました。

「ハイラム君。君は我々の新しいクラブの中で仕立て屋という職業を持っています。私は弁護士です。それぞれのメンバーは自分自身の職業を持っているのですから、我々はお互いに自分の職業を活かした取り引きをしてはどうでしょう」

この日の会合では「一人一業種で親睦を深める会を作る」という設立の趣旨が熱っぽく語り合われ、クラブには実業人だけではなく法律家、医師、宗教家と、あらゆる職業の人を集める事になりました。

1905年3月9日にハリスの事務所で行われた二回目の会合では、再びクラブの趣旨と今後の可能性について討議されました。

出席者はポール・ハリス、シルベスター・シール、ガスターバス・ロア、ハイラム・ショーレーに加えて、印刷業ハリー・ラグルス、不動産業ウィリアム・ジェンセン、楽器製造業アルバート・ホワイトが参加し、事業の経営者、共同経営者、または会社役員でなければ会員になれないことが決められ、さらに今後の会合の持ち方について、会員の事業所を持ち回りしてはどうかという議論が闘わされました。

「個々の会員の事務所で行われる例会をしたらどうだろう？」ハリスはそう提案しました。「その方法なら我々それぞれはすぐお互いの職業に対する詳しい知識がつかはずです。持ち回りという取り決め事はすばらしいことだと思います」

その考え方は貴重な意見だったので、満場一致で採用され、例会は楽観的な雰囲気の中で終わりました。三回目の会合は、3月23日にシルベスター・シールの事務所で開催された。シールの会社で会合

を開いたことを記念して、ポールの指名によって初代会長にシルベスター・シールが就任したことは、実質的な主催者であるポールの謙虚な人柄が忍ばれると共に、依頼されたことは、どんなことでも快く引き受けるというロータリーの伝統として、現在に引き継がれています。

この日の会合でロータリークラブという会の名称が決まり、会員身分や役職も一年限りでローテーションすることが決められました。

RI理事会は1905年2月23日に開かれた会合を最初の会合と認めて、この日を「ロータリー創立記念日」と定めています。



左から 創始者ポール・ハリス、シルベスター・シール会長、ウィリアム・ジェンセン幹事、ハリー・ラグルス会計



シルベスター・シール

ハイラム・ショーレー

ポール・ハリス

ガスターバス・ロア